

# 今日の人文地理学

—Tim Cresswell の近業に沿って—

松 尾 容 孝\*

## 1 はじめに

### (1) 目的

小論は、20世紀半ば以降新たな地理思想が百花繚乱して現在に至る人文地理学の動向を、Tim Cresswell (2013) *Geographic Thought* を羅針盤にして定位し、現在の諸相の先を見据えることを目的とする。

### (2) Tim Cresswell の地理学

Tim Cresswell ティムクレスウェルは、イギリスに生まれ、UCL ロンドン大学地理学科を卒業した。人文主義地理学者 Yi-Fu Tuan イーフトゥアンに師事して、1986年アメリカ合衆国ウィスコンシン大学大学院に進み、1992年学位を取得した。1993年から1999年までウェールズの Lampeter ランペーター大学、2006年までウェールズの Aberystwyth アベリストウィス大学に勤務し、その後2013年までロンドンの Royal Holloway ロイヤルホロウェイ大学で人文地理学の教授として教鞭をとったあと、2014年に高度な研究大学と評されるボストンの Northeastern ノースイースタン大学に移った。*Cultural Geographies* の責任編集者3人のうちの1人で、詩集 *Soil* を2013年に出版した詩人でもある。

---

\* 専修大学文学部教授

人文主義地理学に哲学的深遠さを感じてトゥアンのもとで研究したクレスウェルは、place 場所や mobility 移動性に関心をもち、それが現在も研究の中心をなしている。一方で、渡米に先立って、マルクス主義地理学、とりわけ文化形成への資本主義や階級的作用を重視する新しい文化地理学に惹かれ、渡米後も David Harvey ハーヴェイや Neil Smith スミスらのマルクス主義地理学と、マルクス主義社会学に関心を寄せて、構造主義的な思考を深めた。1980年代後半にはマルクス主義から徐々にポストモダン、さらにポスト構造主義に関心をシフトさせ、フェミニズムにも注目した。Pierre Bourdieu ピエールブルデューや Michel Foucault ミシェルフーコーへの関心を深めて、Lampeter 大学赴任前後から自らの地理学に取り込んだ。上記以外にもさまざまな地理思想の影響を受けて現在に至ることをクレスウェルは表明している。

1950年代からの空間論地理学やクレスウェルが体験した人文地理学の諸潮流を、20世紀第四四半世紀に人文地理学を学んだ者は共通して経験した。ただ、国により潮流の波及時期や影響に差があり、研究者によって各思想へのスタンスは異なる。多岐にわたる地理思想を解説し、それぞれの存在理由を提示することは容易でない。クレスウェル『地理思想：批評的紹介』も限界を逃れ得ない。しかし、クレスウェルが諸潮流の真っ直中に体験と評価を通じてみずからの地理学を構築し、今ふたたび諸潮流を振り返って主体的に紹介する本書には、血肉を通して深く読者に伝わる重みがある。

### (3) 分胎する人文地理学にとっての学史の意義

18世紀後半以降の地理学において、人文地理学は独自の内容と性格を帯びて分胎してきた。自然地理学との関係を軸にして、18世紀後半から1970年頃までの人文地理学の諸潮流を概観すれば、自然哲学、地理的環境論、生活様式論、景観論、地誌、地域論、空間論、行動主義、人文主義、マルクス主義などを挙げうる。これらは、前二者、中四者、後四者を、それぞ

れ、自然地理学内部の人文地理学、自然地理学と対象を共有する人文地理学、自然地理学とは独自の人文地理学に三大別できる。後四者では、研究に際して自然条件を直接の対象や説明要因として扱うことがほとんどない(松尾1989)。

クレスウェル(2013)は、20世紀前半以後の人文地理学の諸潮流として、地域論、空間科学・計量革命、人文主義地理学、マルキスト地理学、フェミニズム地理学、ポストモダニズム、ポスト構造主義地理学、関係性の地理学を挙げている。70年代以降の潮流として、フェミニズム、ポストモダニズム、ポスト構造主義、関係性の地理学の4つがある。これらの大要および自然地理学との関係はどのように整理できるであろうか。

また、上記の地理学観と不可分の関係にある、地理学の分析技法、その重要な技法であるフィールドワークないし観察・観測・資料収集の方法論を概観すると、次のように要約できよう。18世紀後半から20世紀半ばまで、順次考案され実践されたフィールドワーク法には、おおむね、探検横断記録、エアリアサーヴェイ、説明的自然地理、説明的人文地理、分析的経済地理、地域の等質性と多様性、地域の組織化、文化の起源と伝播の8つのタイプがある(R.Platt 1959)。「探検横断記録」は、近代地理学確立以前の時代になされていた、探検による地図作成や探検ルート沿いの情報の収集・記録化などの調査手法を指す。「エアリアサーヴェイ」は、近代科学としての地理学の成立ののち、共同調査に際して、地理学が諸分野に期待された役割、たとえば測量を分担するといった共同研究方式での地域調査手法をさす。「説明的自然地理」は、地形・地質や気候、水文、動植物などの調査を通じて得られる知見によって自然地域の形成史とその特性を説明したり、William Morris Davisの地形輪廻説のように仮説・予測を踏まえて資料収集し、構造・プロセス・ステージ(パタン)を説明する(記述解説する)地域調査法を指す。「説明的人文地理」は、環境決定論にみられるように、自然環境によって人文現象を因果論的に説明する調査手法を

指す。「分析的経済地理」は、地域の経済的特徴の要因を、地域の内部条件の分析と他地域との比較分析を合わせて明らかにする調査手法を指す。「地域の等質性と多様性」は、景観や土地利用方式など可視的・擬似可視的な地表上のまとまりにより、対象地域をいくつかに分け、各類型の特徴や類型間の相違や地域全体の多様性を説明する調査手法を指す。「地域の組織化」は、活動を通じて地表の要素群が改変され、結合して空間的にまとまる仕組みとその単位、さらに個々のまとまりが全体地域のなかで組織化・統合されるさまを調べる調査手法を指す。これら2つの景観や地域の構造理解の手法は、コロロジカルな（水平方向の）土地単位の異同の把握や垂直方向の土地属性の異同と秩序の把握である。それに対して、「文化の起源と伝播」は、時間軸を導入し、文化現象の起源地からの伝播のパターンとプロセスを調べる調査手法を指す。年代決定により伝播の新旧と地域間関係を把握する場合と、分布地相互に含まれる示準指標により先後関係を判断する場合がある。

8つのフィールドワークの手法が用いられた1950年代までの地理学では、人文地理学と自然地理学が、それぞれに特有の事象や説明要因を扱うものの、地表上の現象の把握や地表に則して現象を分析する手法を共有していたことがわかる。景観や地域を観察・観測し地生態条件や地球の運動と関連づけて研究する自然地理学と比較して、景観や地域の把握において時代や制度の違いなど地表に還元できない条件が大きな規定力をもつ人文地理学では、フィールドワークの内容や解析のしかたが大きく異なっていたが、地表を読み解く方法論を共有していた。共通の価値観によって基盤を一にしていたといえる。

これに対して、1970年代以後、人文地理学における「フィールドワーク」あるいは観察・観測・資料収集は、一般に統計資料の解析への依存が圧倒的に拡大した。景観・地域・空間を対象とする場合も、社会的構成物としての景観・地域、人々の愛着や民族・ジェンダー差別の場としての地域、

思想・イデオロギーを象徴する人工的な地表構成物群を読解した地域像、具象的な空間ではなく配水網・交通網・機能別施設配置などトポロジカルなネットワークや構造のパターンとプロセスで代替される空間観が主関心をなす研究も多い。一方、自然地理学では、景観や地域などの具象的な地表観察・観測を主とする点は変わらないが、高度な観測・測定機器の整備により、観測収集データの大量化、解析能の向上と、計量化がいつそう推し進められるにいたった。両者の「フィールドワーク」は大きく変容し、内実を異にすることが多くなった。

地理思想とフィールドワークの両方において自然地理学との関係の分岐点に位置するのは、空間論地理学である。空間論地理学は、扱う対象の点では従来の具体的地表から大きく乖離したものの、論理実証主義に基づく方法論とデータ処理による還元主義的証明法に依拠した点で、自然地理学と基盤を共有したといえよう。空間論以後のフィールドワークの内容、観察・観測・解析のしかたはどのように展開したのであろうか。

人文地理学における地理思想ないし地理学観・認識論、およびそれを実現するための方法論・「フィールドワーク」法の展開動向を対象に、次章ではマルキスト地理学までを、三章ではその後の人文地理学を検討し、それらを踏まえて四章で諸相の先に関して考察を取りまとめる。

## 2 科学の模索

### (1) 地域：普遍（一般）と個別（特殊）の関係を軸に

プラトンとアリストテレスにより、chora(地域)の研究=chorology, topos(場所)の研究=topology, 場所の形状・地表の形状=topographyの研究が提示された。一方で、ヘロドトス、エラトステネス、ストラボン、プトレマイオスらにより、地球の計測、地点間距離、緯度経度の計算、投影法、

世界図作成などからなる数理地理学が確立した。両者は不可分に結びつき、中世イスラム世界で栄えた後、15世紀ルネサンス期イタリアに逆輸入された。ルネサンスを支え、大航海時代の探検と交易の隆盛により、科学とヒューマニズムを結ぶ理性に基づく地理学が確立した。ドイツ人ヴァレニウスがアムステルダムで執筆した『一般地理学』は、絶対地理学（数理地理学）、相対地理学（太陽系の惑星との関係や地球の公転に関わる現象の研究）、比較地理学（山・川・潮流・大気等の運動など地形・気候・海洋に関する研究と航海・地点の緯度経度などの研究）からなる。ニュートンが本書を1672年にイギリスで出版し、2度改訂した。自身が本書を用いて授業を担当するとともに、本書は広範に指定図書として用いられた。ヴァレニウスは、特殊地理学、すなわち地域の研究や場所の理解についても、観察に基づいて一般地理学とは異なる方法論が必要と主張したが、具体的展開のないまま、『一般地理学』執筆直後に死亡した。

18世紀後半から19世紀前半にかけて、近代地理学が大学での学問として徐々に確立した。カントは、ケーニヒスベルク大学で1756年から40年間地理学の講義を行った。空間と時間はどの要素よりも重要で、物事存在を支え、物事を認識する方法である。歴史的事象は場所をともなっこそ意味があるから、空間がもっとも重要な存在である。この信念のもと、主に自然地理学（ヴァレニウスの一般地理学）を教授した。同じくドイツで19世紀前半にフンボルトが現地調査での観察・観測・地図化によって自然地理学を主要要素とする博物学、リッターが自然哲学的認識を残しつつも、書斎での知識を活用して個別から一般を志向する人間世界を主とする地理学と地域地理学を、それぞれ体系化した。これに続いて、19世紀前半から後半に、イギリス、フランス、アメリカ合衆国、日本などで順次地理学の学会や大学での地理学組織が確立した。

19世紀末から20世紀初頭の環境決定論（地理的環境論）の時代を経たあと、地政学（帝国主義の道具としての学）の役割を部分的に長く残すもの

の、アイデンティティをもつ社会集団とそれが刻印した景観や生活様式を理解する景観論や生活様式論（環境可能論）、歴史的厚みを持ち自然・人文要素が総合的に結びついた地域を研究する地域論が、普遍（一般）と個別（特殊）への関心を両輪に据えて、20世紀前半の地理学の中心となった。

地理学史上、普遍（一般）と個別（特殊）に関する議論は、繰り返されてきた。論理実証主義を科学の前提とする1970年代以前では、個別を素材にして、抽象により普遍（一般）に到達することが、科学と同義であった。古代ギリシャ以来の数理地理学や、ヴァレニウスの『一般地理学』つまり数理地理学（絶対地理学）、相対地理学、比較地理学では、個別（特殊）の問題は発生しない。これに対して、プラトンやアリストテレスが示した「地域」は、地球上に異なる条件のもとに所在する。個々の地域が個別（特殊）であるとして、では「地域」を対象にした普遍（一般）の研究とは何か。個別（特殊）の地域を研究することの意味は何なのか。

生活様式論を進めた Paul Vidal de la Blache ブラーシュは、pays, 国、大陸州などのさまざまな空間次元のモノグラフと世界地誌の作成、「地的統一」概念、『人文地理学原理』の執筆などにより、個別から一般への抽象や個別と一般の関係を体系化しようとした。Hettner ヘットナー、その強い影響を受けた Richard Hartshorne ハーツホーン（ハートショーン）は、chorology ないし areal differentiation を柱にすえた。場所ごとの差異をもつ個別の大小の地域の研究が普遍の研究とともに存在することが地理学の科学としての特徴であるとした。しかし、個別の地域の研究が個々の地誌（モノグラフ）、普遍の研究が要素群の全体とそれらの相互作用の体系的解明を意味するとの説は、哲学的思考にとどまり、後者の達成は願望の域をこえなかった。Brian Berry ベリー（1964）は地域と要素（事象項目）群を行と列にもつ地理マトリックスを試案的に示したが、地域の普遍的研究は進展しなかった。

地域の普遍に関する実証主義的成果としては、地域の階梯に関する諸研

究を挙げることができよう。Charles Darwin ダーウィンの生物分類（種属科目綱…）と合目的探検の成果を、地理学に導入した諸研究を指す。世界を数次元の階層に分節化ないし区分して、地球全域から小地域までの次元の地域を比較対照し、各次元の地域の機能を比較考察する研究のことで、多くの地理学者によって取り組まれた。最も代表的な研究が、Richard Chorley and Peter Haggett チョーリーとハゲットによる「地理尺度」(Gスケール)の提案であり、日本ではそれを活用した野間ほか(1974)などの研究がある。同様の関心に基づいて、ドイツやフランスでも独自に地誌学や地生態学による地域区分、地域の階梯(地域システム)に関する研究成果がある。水津一郎の「地域の論理」、さらに時間軸を導入した「Rm群の通時論的發展」もこれに属する。これらの普遍化に先立って、地域地理学においても、各次元の地域の機能を比較し、上下の階梯の地域を統合してアメリカ合衆国の地域構造図を示した Allen K. Philbrick フィルブリック(1957)の研究がある。

地域をめぐる問題には、普遍と個別の問題以外にも、地域を客観的に実在するとみなすのかそれとも人々が考えた社会的構成物とみなすのかの意見対立がある。また、個々の地域が内部における等質性と外部との差異性により区画されてきたのに対して、地域の理解ないし地域変化の考察には内部での分化や外部との結合のしかたなどの関係性にアプローチすることが必要であるとの批判がある。地域の実在論と地域の知的概念論(地域の社会的構成物論)に関する論争には、その当時自然地理学と共通の土台の下で人文地理学が展開していた時代性が反映している。また等質性と異質性に基づく地域区分と地域理解は、静的な地域の(構造の)描写には適しているが、地域の形成や変容の考察には適さない。地域内外の関係性のアプローチはまさにこの点が必要であるといえよう。



## (2) 空間論—目的と現実の乖離—

1930年代には環境決定論を否定する思想として、個性記述の主張が意味をもった。しかし、地理学を科学として進展させるには、個別の地域・場所に関心をよせるだけでなく、科学が共有する価値観や方法論、すなわち、論理実証主義に基づく観察可能な事実群の収集・総合と証明が必要であった。地理学は、地学の一つとして大学に学科を設置する場合が多く、地学が属する理学部の諸分野と伍した方法論が必要であった。ヴァレニウス流の数理地理学・絶対地理学・比較地理学はおおむね地図学・自然地理学として伍し得たのに対して、地域や場所の研究は人文地理学・地誌学として展開した。特定の地域に知的関心を収斂させる地誌の隆盛は、地理学内部においては自然地理学・人文地理学の総体を投じた知的好奇心を成熟・完成させる重要な場であったが、他の科学には一般を追求しない非科学的行為と映った。

大学での制度化において地質学と地理学が多く競合関係にあったアメリカ合衆国の事情が背後にあるが、1948年、ハーバード大学は、地学と地理学で組織していた学科に対して、教授 Derwent Whittlesey ホイットルシーと講師 Harold Kemp ケンプ以外に地理学の専任教員を採用せず、地理学カリキュラムを縮小・廃止することを決定した。当時地理学教室には、他に2人の人文地理学の専任教員がいた。ホイットルシーの指導を受けたハーバード大学生え抜きの政治地理・資源論を専門とする Edward Ackerman が1940年から、またシカゴ大学で学部・博士課程・学位、ハーバード大学で修士課程を学んだ都市・交通・地域開発を専門とする Edward Ullman が1946年から勤務していた。しかし、ハーバード大学学長は、地理学が明確な科学的方法論を欠き、特に人文地理学は非科学的であること、主任教授ホイットルシーが人文地理学者で、彼および彼の人事が批判の対象であることを原因に、2人の遠からずの解雇を決定した。アッカーマンはこの決定の直後にシカゴ大学教授として転出し、アルマンは1951年まで

助教授として勤務したあと、ワシントン大学に移った。2人は地理学の社会的有用性、科学的な人文地理学の推進に大きく貢献した。ハーバード大学の決定は他大学にも波及し、その後著名な大学において地理学を廃止する動きが続いた。上の決定の後、ハーバード大学学長のもとで組織された委員会は自然科学組織内ではなく別に地理学科を設立する答申をだしたが、それは実施されなかった。この事件により、科学的な人文地理学への志向が強まった。

イギリスでは商業地理学をはじめ社会的に有用な人文地理学の確固とした伝統があり、地域論においても、areal differentiation 地域分化だけでなく、regional synthesis 地域的総合に関して科学的分析技法を開発し、行政や社会のニーズを担当してきた厚い研究蓄積がある。しかし、他の国々では、人文地理学における科学的分析は立地論の分野などにとどまっていた。

Frederick Schaefer シューファー (1953) は、Gustav Bergmann ベルグマンの思想の影響を受けて、地域地理学の個性記述的性格を批判し、法則定立的な地理学を主張した。William Bunge バンジ (ブング) (1962) 『理論地理学』やハゲット (1965) 『人文地理学における立地分析』はその考えを支持し、計量革命が展開した。チョーリーとハゲット (1967) 『地理学におけるモデル』は、「複合分野の地理学のなかで「個別」は主に人文的部分でなされているが、科学として「一般」を追求すべきである。その際、現実を単純化し再構成して一般的な形で提示するモデル (化) は重要で、地理学のモデルとはいかなるものか」を論じた。ハーヴェイ (1969) は、地理学が扱う事象は厳密な論理実証主義に適さず例外も多いが、普遍的な法則が支配する科学の範疇にあるとみなすべきだと主張した。ワシントン大学やスウェーデンのルント大学などが空間論地理学の拠点となり、地理学の学会誌の多くに数式主体の論文があふれた。こうして、空間論さらに主体の属性を反映できる確率論を導入した行動地理学が展開し、論理

実証主義を方法論とする、科学としての地理学へとパラダイムの転換が進んだ。Abler, R., Adams, J., and Gould, P アブラー・アダムズ・グールド (1971)『空間の組織：地理学者の世界の見方』はその一つの到達点といえよう。

ここで実証とは、Auguste Comte オーギュストコントや Derek Gregory グレゴリーを参考に、次の諸原理に基づく方法論を指す。①科学知識は観察可能な事実に基づくべきである（科学知識は経験論に基づく観察により得られる）。2つの事象が規則的かつ繰り返して連動する場合、一方を他方と関連付けて両者の発生を説明・予測できる。②科学知識は一定の確かさで支持されないといけない。他の科学者が同じように確かめることができないといけない（確実性・了解性）。③科学知識は検証可能な理論の構築に基づかないといけない。論証や反証ができない価値に関する部分は捨象し、考察の対象にしない。④科学知識は有用で潜在的に応用に供しうるべきである（有用性）。⑤科学知識は、完全な社会の形成を最終目標とし、前進途上で、未完で、形成（建設）過程にある。その意味で、絶対的でなく相対的である（相対性）。

空間論地理学ないし計量革命は、第一義的に他の諸科学と同様に科学であらうとする取り組みであった。しかし同時に、この取り組みを通じて、人文地理学は自然地理学と同じ科学方法論に基づく地理学としての一体性を追求した。地域現象の要因としての自然条件の考察によって一体性を追求するのではなく、実証主義の方法論を空間現象の分析に用いることで、実証主義の方法論を地圏現象や環境現象の分析に用いる自然地理学との一体性を追求した。

空間論は多くの理論や仮説を生み出した。とりわけ経済学と地理学の境界領域において、J.H.von Thünen チューネンの農業立地論（『孤立国』）、Alfred Weber ウェーバーの工業立地論、August Lösch レッシュの経済立地論（『経済の空間的秩序』）、Walter Christaller クリスタラーの中心地論

など、19世紀から第二次世界大戦以前になされた、一群の仮定を設けて個別性の影響を排除し、仮定の条件下で生じる立地現象を論理的かつ妥当性をもって演繹的に導出する研究をテキストに用いて、立地と空間秩序に関する仮説検証・法則定立をめざす研究が多くおこなわれた。Michael Chisholm チザム（1962）『農業集落と土地利用』、William Alonso アロンゾ（1964）『立地と土地利用』、ハゲット（1965）『人文地理学における立地分析』、ベリー（1967）『市場センターと小売流通の地理学』、Allan Pred プレッド（1967）『行動と立地』、Peter Lloyd and Peter Dicken ロイドとディッケン（1972）『空間における立地：経済地理学の理論的研究』など多くの成果が刊行された。また、空間論の隆盛は、経済学の地域経済学や空間経済学と競合しつつ展開した。アメリカでは Walter Isard アイザードが独自に戦前から戦後にかけて経済学の分野で立地論・地域科学を進展させた。アイザード（1956）『立地と空間経済』をはじめとする研究や1954年の Regional Science Association の結成は、地理学にも多大の影響を与えた。

立地論以外にも、空間論の科学方法論は浸透し、「運動」「移動」に関する研究が盛んになった。アルマンは「ものが地表上を動くのは何がさせるのか」と自問し、場所（地点）間の相補性、介在機会、転移性の3原理を挙げた。介在機会は最小努力、転移性は時間やコスト、つまり「場所（地点）の効用＝最小努力で最大便益」を意味する。移動自体を規定する法則としては、重力モデルと空間的相互作用理論、つまり、「運動量は距離逆減」で「近距離の事物間のほうが遠距離の事物間よりも相互作用する」に還元できる。しかし、還元主義的定式化は大量の現象を概括する法則として妥当であるが、地理学にとっては、場所、時間、社会的特徴の違いによる法則の作用のあり方を経験的研究で検討して、より正確な空間関係の法則や空間の論理を追究することが重要であると空間論地理学者は主張する。

以上の人文地理学とは異なり、自然地理学では、地形学、気候学、水文

学、地生態学、生物地理学、土壌（地理）学等の重分野において、観察・観測・分析を通じて数多くの理論が構築されているが、自然地理学者はそれらの個別理論の次元ではない一般理論に対しては、総じて関心がなく議論自体を好まない。また、理論の検証に関しては、Karl Popper カールポパーの批判的合理主義を用いる。批判的合理主義は、「反証主義」つまり誤りであることが証明されるまで正しいと仮定し、かつ理論と現実の間には一時的な適合が存在するだけで理論が現実を正確に反映していると考えないし、純粋な観察などありえないから帰納法の原理自体に論理的欠陥があると考えている。その結果、演繹的理論（仮説）を立て、経験的証拠で妥当性を検定して、最善の理論（仮説）を残す。

しかしながら、1960年代末以降、空間科学、実証主義、計量的手法は、多くの人文地理学者の批判にさらされるようになった。地域地理学者の根強い空間論への拒絶とは別に、人文主義とマルクス主義が、空間論地理学を、非人間的な地理学、世界の社会問題に関係しない地理学として批判するに至った。科学的な地理学を目指した空間論が、科学を追求するあまりに地理学の対象を矮小化し、あるいは精緻な手法の追求に没頭して学問の目的を忘れ、批判される状況を引き起こした。

それにもかかわらず、空間論の意義や役割は大きく、存在価値を示す研究者が活躍していることも事実である。理論を普通に議論できるのは空間論のおかげである。統計を用いた計量的手法は、今も地理教育に必須である。「空間」の語は重要な用語として定着した。空間関係の動的性質への注目により、事物の（静的な）形状だけでなく、事物の運動とプロセスへの関心を復活させた。今も多くの地理学者が空間科学を実践し、理論地理学の雑誌 *Geographical Analysis* は刊行を続け、現代地理学に確固とした場を占めている。原子力発電所と廃棄物処理基地の周辺での白血病の発生頻度などの研究、真と偽に単純に二分できない現象に操作的定義を与えて処理をするファジー論理に基づく定量的モデリング、GIS 科学が出現して「地

計算」(統計資料と地図情報の一体的格納により計算処理結果を地図として表現・出力する技法)が確立され、ハーバード大学に21世紀地理分析センターが設置され、地理学が空間分析機関として復活した。GIS「地計算」を行う空間科学者 Stan Openshaw オープンショーは、地理学が過度に理論的になるのを排し、GIS空間科学を実践している。理論を頑なに追求して空間論を推進した1950～60年代とは隔世の感がある空間論が、現在展開している。

### (3) 大理論の終焉と主体の復権

空間論地理学は、「合理的人間」、「合理的経済人」を前提にして、人間が組織する客観的な空間構造や空間運動を追究する。しかし現実の人間は、常に合理的に行動するわけでも、経済的費用が最小になるように行動するわけでもない。創造的で想像的な人間がどのように世界を知り、意識に根ざして生活し行動するのか。人間を中心にすえたルネサンス以降の人文主義にたちかえり、主観性、主観的経験に注意を払い、場所をとおして人々の知覚や感情と一体化した生活世界を理解(理会)する認識論にたつのが、人文主義地理学である。

一方、ベトナム戦争や貧富の差・犯罪率の上昇などの社会問題が1960年代に深刻さを増したにもかかわらず、空間科学は急を要するこれらの問題に取り組むことがほとんどなかった。地理学は歴史的に国の統治、帝国の道具としての役割を果たしてきた。空間論地理学はたとえ積極的でないにせよ、資本主義が必然的に引き起こす搾取・抑圧などの社会問題を研究によって追認してきた。これに対して、政治的中立や客観よりも、社会問題に取り組んで正義や平等に貢献することをめざしたのが、マルキスト地理学(ラディカル地理学)である。

1960年代末に台頭した人文主義地理学とマルキスト地理学は、上記のように大きく異なるが、ともに空間論地理学を批判した。これらの地理学の

方法論あるいは方法論を規定する認識論は、空間論や自然地理学をはじめとする科学といかなる共通性を持ち、どのように異なるのであろうか。マルキスト地理学が依拠するマルクス主義は、史的唯物論（唯物史観）に基づく考え方をとる。つまり、弁証法的唯物論を用いて、「イデオロギー（上部構造）の下部で作用する客観的諸条件（経済的下部構造）を確認する。人類史は（支配者と被支配者の）生産関係と（機械化や専門技能の水準・状態などの）生産諸力により、原始共産制→古代奴隷制→封建制→資本主義制→共産主義制への不可避的進歩のレールの上にあり、生産関係が生産諸力発現の妨げになる矛盾が次の時代への移行の原動力になる。つまり、経済的下部構造によって上部構造が規定される」と考える。これを踏まえ、マルキスト地理学は、生産諸力としての空間（場所・地域）が資本主義において果たす役割の追究を主要課題とする。資本主義のもとで空間はどのように形成され、社会の生産に対していかなる役割を果たしているのか。たとえば、不均等発展の発生 of 理論的説明を追究し、不均等発展とは、資本（会社・事業体）が絶えず Spatial fix（最大利潤が得られる理想的な場所）を求めるプロセスの一般名称であるとする。従来の地理学では空間は自然や文化や社会の諸側面を映し出すもの（所与。社会や政治や文化が空間の形成主体）であった。マルキスト地理学は、従来の議論を逆転させ、空間を資本主義の方程式の基本的な変数に位置づける。「空間」は資本によって生産され、生産と再生産に寄与し、生産関係とその秩序に結びつき、社会や政治や文化を作り拘束する、と。

マルキスト地理学の認識論は、進歩主義にたつ大理論（少数の概念を依拠すべき土台や本質にして、できる限り多くの事象を説明する全体主義な仮説・理論。メタナラティブ）の一種で、後にポストモダニズムによって批判される。しかし、大理論は、ほとんどあらゆる科学や思想において用いられてきた。神の摂理、神に代わるイデオロギー、科学主義（論理実証主義、構造主義、モデル）などが、事象を説明し「真実」を決定する大理

論であった。事象群・諸現象を対象としてとらえ、真の解釈・理解を抽象により導出する営為は、歴史上、主義主張は異なっても、大理論として展開してきたといえよう。この方法論や認識論に挑戦する思想に連なるのが、人文主義地理学である。

人文主義地理学（人間主義地理学）は、空間科学を批判するとともに、構造主義をも批判した。空間科学の非人間性を否定するとともに、見えざる神の手のごとく深層に超有機的全体理論の存在を仮定する考え方、すなわち大理論を批判する。人文主義地理学は、世の中の人の意識に注目し、人の意識が客観世界や世界の存在意味を形成する絶対的な場であるとみなす。つまり、これまでの地理学では当然とみなしていた、対象の存在を前提にして対象を観察・観測し、事実データを収集・分析するのではなく、対象の存在を自明とする態度を保留して、自分の意識が対象の世界とその意味を形づくると、人間の意識の側から対象を捉える見方へと転換（現象学的還元、特に超越論的還元）し、人間の意識と対象との関係の重要性に着目した。人間の意識の側から対象を捉える方法論は「経験」である。主観的で、研究を再現することもできず、したがって論証も反証もできない。人々がそこで経験し自らを確認する場所を、研究者は、インタビュー、オーラルヒストリー（口述記録、口述史）、参与観察、自己照射などの方法によって、（間主観的に）理解する。現象学の影響を強く帯び、論理実証主義とは大いに異なる。

主体をなす人々が変われば意識は異なるから、対象（場所）は、普遍的・必然的な本質存在ではなく、個別的・偶発的な現実存在（実存）である。対象（場所）を現実の世界つまり経験世界に沿って考察することを重視するから、実存主義の立場にたつ。もとより、帰納法や演繹法により還元主義的に法則定立を志向するのではない。しかし、一方で、人文主義地理学は、人と世界を現実存在として読解するにもかかわらず、個性記述を志向せず、対象（場所）の普遍的「真実」の解明を志向する。主体との関係に



より対象（場所）が存在するなら、対象（場所）は普遍的な本質存在ではなく個別的な現実存在である。しかし、人文主義の関心は、個々の対象（場所）の個別的な研究ではなく、対象（場所）の本質＝普遍やコスモロジーの追究なのである。この点に、人文主義地理学が、事象群・諸現象を対象としてとらえる認識論に挑戦し、「経験」の間主観的理解を方法論として、人間主体の「真実」を追究しながらも、「真実」の一義性、普遍的「真実」の存在を信奉し、大理論（メタナラティブ）を完全には払拭しない特徴を指摘できる。地球上の人間、世の中の人間の存在は、はたして一義的な「真実」として説明できるのか。見かたを変えれば、人文主義地理学は、土台に大きな転換をせまりながらも、近代以来の科学としての地理学の模索を継承したともいえる。人間の経験の一義性による場所の本質（普遍）の解明は、人間の経験に対する内在的な問いから導かれたのか、それとも科学としての地理学への信奉がこの追究に向かわせたのか。人文主義地理学の立脚点の特徴は、その後の人文地理学の諸潮流を検討する中で、おのずと明らかになるであろう。ここでは、マルキスト地理学、人文主義地理学の成果と特色を概観する。

上述したように、1960年代に社会問題に対して、サルトルをはじめ多くの研究者が積極的な行動を主張したにもかかわらず、地理学では、伝統的地理学だけでなく新たな潮流である空間論や人文主義地理学も、社会問題を研究対象にしようとする動きは少数であった。近代地理学史においても、Pjotr Kropotkin クロポトキンや Elisée Reclus ルクリュなどのアナキスト地理学者の単発的な活動にとどまった歴史をもつ。社会問題への関心は、1968年マサチューセッツ州クラーク大学において急進的な地理学者のための雑誌 *Antipode* 創刊により開花した。1970年代、地理学の relevance（有用性）をめぐる議論では、ベリーはリベラルやマルキストに同調せず保守的態度を表明し、David Smith デヴィッドスミスは選択肢として福利厚生地理学を目指した。これに対して、マルキスト地理学者は relevance

では不十分だと主張した。

Richard Peet ピートは、とりわけ社会科学には客観や価値自由はありえず、何らかの政治的目的に奉仕し、その延命にかかわっていると述べ、かつて空間論地理学を主導したハーヴェイやバンジも、それと決別して、同様に社会問題への積極的関与を主張した。彼らは、地理学理論が、資本主義国に役立つように構築されてきたことを問題と考え、社会問題の解決には新たな地理学的思考が必要と考えた。ハーヴェイ（1973）『社会正義と都市』において、チューネン理論（実質は都市内部の土地利用・土地市場）をシカゴで検証し、「検証結果こそが搾取や民族差別を示すものである。アカデミズムの我々はそれがおかしいと思い、その成立条件に挑み、理論を定式化し、人間的な社会変化を引き起こす上位の思想体系の構築をめざすべきだ」と主張した。バンジ（1974）は、デトロイトのインナーシティの荒廃地区への「探検」を率い、アカデミズムとしてどのような助けができるかを問うことを提唱し、自ら、感染症や道路の安全問題での手助け（衛生・インフラ構造の改善）に取り組んだ。Neil Smith ニールスミス（1984）『不均等発展』は、資本主義の空間形成が、資本主義の危機の回避・最大利潤追求のため、不均等発展を内在し、避けることができないことを示した。Henri Lefebvre ルフェーブ（1991）は、資本・資本主義が、日常の生産・再生産を支える空間（道路や財の流れ）、生産関係とその秩序に結びつく空間（中心地理論や重力モデル）、表象空間（社会生活の秘密に連なるコードやシンボルの空間）の3種類を生産し、空間が社会を生み出す道具になっていること、空間を作らない限り社会を生み出せないことを示した。

さらに、マルキスト地理学は、自然と文化に注目する。自然は人類が労働を通じて変えるものであると定義し、現在では自然は人為的に残されており、それは保護により利益を得るためとする。また、ポリティカルエコロジーの視点から、土壌侵食を自然現象や直接的な人間活動の産物とみな

さず、社会の組織化の結果生じたマージナリティの一形態、世界経済の構造の産物とみなす (Piers Blaikie and Harold Brookfield プレーキーとブルックフィールド1987, Erik Swyngedouw スウィンドウ1999)。文化に関しても、急進的文化地理学の観点に立って、ヘゲモニー闘争の場、文化景観を物的地物とイデオロギーを同時に映す構造物とみなす (Raymond Williams ウィリアムズ1980)。そして資本主義は、プランナーに、闘争の歴史ではなく英雄の歴史としての役割を文化的景観に担わせる (Don Mitchell ミッチェル2000)。

すべてを包括する上位の理論構築を主張したマルキスト地理学において、40年の歩みを経た今、新たな動きが顕在化している。世界中を覆っているかにみえる資本主義のもとでも、農家市場、地域通貨、住民の相對サービス交換など、さまざまな動きが各地に息づいている。これらの動きは決して世界においてではなく、局所において、しかし各地において生じている。今、これらの多様な経済の多彩さに注目することが求められている。その研究は、構造主義の大理論とは位相を異にするが、マルキスト地理学にとり重要である (J K Gibson-Graham ギブソン-グラハム2006a, 2006b)。

人文主義地理学のさきがけとして、つとに John K. Wright ライト (1947) や David Lowenthal ローウェンサール (1961) は、地理認識や地理的想像力の研究の必要性を *geosophy* や *geographical epistemology* の語を用いて提唱した。未知の大陸はもはや世界にないが、人々の頭の中の地理的知識とその体系化、地理的想像力、文化や習慣に彩られた個々の人ごとの地理は、いまだ未知の研究領域である、と。換言すれば、従来の *real world* の研究に対して、*imagined world* の研究の提唱 (Hugh Prince 1971) ともいえよう。その後、1960年代末から実存主義 (ニーチェ、ハイデッガー、サルトル) や現象学 (フッサール、サルトル、メルロポンティ) を摂取し、人文主義地理学の名の下に、1970年代半ばに開花した。従来の地理学の「場所 X はどのようなところか」「場所 X と場所 Y はどのように異なるのか」

ではなく、「場所とは何か」を問う。場所における人々の主観的経験に注意を払う。広義には人と環境（世界）を経験・体験で結ぶ。存在の実践を通じて家（生活世界）を作ろうとすることが「住む」であり、「現存在の「住む」」により場所の本質を知る野心的営為が人文主義地理学である（Edward Relph レルフ1976『場所の現象学—没場所姓を越えて—』）。その記念碑的著作として、環境に対する人の知覚・態度・価値観、場所への愛を、主体と客体に分離することなく表白するトゥアン（1974）『トポフィリア』がある。

人文主義地理学は、文学（小説）や絵画を素材に用いて検討する。小説は事実を求める素材としてはふさわしくないが、小説には諸事実をこえた真実が描かれている（Douglas Pocock 1981）。絵画も同様であり、世界の中の人（“being-in-the-world”）の、知覚・態度・価値観が凝縮されている（Denis Cosgrove 1984, Stephan Daniels 1993）。同様に、生活世界における日々の（ルーティーンともいえる）移動の繰り返しや、老人が過ごす日々の生活行動に接し続けることで、価値観、（間）主観的理解、寄り添い、共同幻想に陥るがごとき理解（理会）に達することができる。このように、さまざまな素材を用いて、humanity 人間性を回復させ、人間性を内在した場所・環境の研究を、実践している。

人文主義地理学は、誕生とともに実証主義地理学者により批判された。マルキスト地理学者も、人文主義地理学に対して、権力（抑圧・搾取・支配）への関心が不十分でエリート文化に身をゆだねていると批判した。しかし、文化地理学の再活性化に影響を及ぼし、独自の定性的分析手法は人文地理学に受け入れられ、今日に続く人文地理学の諸潮流に影響を与えている。（以下、次号に続く）

#### 参考文献

Ronald Abler, John S.Adams and Peter Gould, 1971, *Spatial Organization: the geogra-*

- pher's view of the world*, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.
- Edward A. Ackerman, 1957, (Obituary) Derwent Stainthorpe Whittlesey, *The Geographical Review*, 47-3, 443-445
- William Alonso, 1964, *Location and Land Use: toward a general theory of land use*, Harvard University Press, Cambridge.
- (ウィリアムアロンゾ (折下功訳), 1966, 『立地と土地利用: 地価の一般理論について』朝倉書店)
- Brian J. L. Berry, 1964, Approaches to regional analysis: a synthesis, *AAAG*, 54, 2-11.
- Brian J. L. Berry, 1967, *Geography of Market Centers and Retail Distribution*, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.
- (プライアンベリー (西岡久雄・鈴木安昭・奥野隆史共訳), 1970, 『小売業・サービス業の地理学: 市場センターと小売流通』大明堂)
- Brian J. L. Berry, 1972, More on relevance and policy analysis, *Area*, 4 77-80.
- Paul Vidal de la Blache, 1917, *La France de l'Est* (Lorraine-Alsace), Armand Colin, Paris.
- Paul Vidal de la Blache et Lucian Gallois, 1927, *Géographie universelle*, Armand Colin, Paris.
- Paul Vidal de la Blache, 1922, *Principes de géographie humaine*, Armand Colin, Paris.
- (プラーシュ (飯塚浩二訳), 1940, 『人文地理学原理』上巻 下巻, 岩波書店)
- Piers M. Blaikie and Harold Brookfield, 1987, *Land Degradation and Society*, Methuen, London.
- William W. Bunge, 1962, *Theoretical Geography*, Royal University, Lund.
- (ウィリアムバンジ (西村嘉助訳), 1970, 『理論地理学』大明堂)
- William Bunge, 1974, Fitzgerald from a distance, *AAAG*, 63, 485-488.
- Michael Chisholm, 1962, *Rural Settlement and Land Use: an essay in location*, Hutchinson, London.
- (マイケルチサム (村田喜代治監訳), 1971, 『農業集落と土地利用』大明堂)
- Richard J. Chorley and Peter Haggett eds., 1967, *Models in Geography*, Methuen, London.
- Denis E. Cosgrove, 1984, *Social Formation and Symbolic Landscape*, Croom Helm, London.
- Denis E. Cosgrove and Stephen Daniels eds., 1988, *The Iconography of Landscape*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Tim Cresswell, 2013, *Geographic Thought: a critical introduction*, Wiley-Blackwell, Chichester.
- William Morris Davis, 1910, Experiments in geographical description, *Bulletin of American Geographical Society*, 42, 412-430.
- Stephen Daniels, 1993, *Fields of Vision: landscape imagery and national identity in England and the United States*, Polity Press, Cambridge.

- Michael Foucault, 1969, *L'archaéologie du savoir*, Gallimard, Paris.
- (Michael Foucault, 1974, *The Archaeology of Knowledge*, (trans. By A.M.Sheridan Smith), Tavistock Publications, London.)
- J. K. Gibson-Graham, 2006a, *The End of Capitalism (As We Knew It): a feminist critique of political economy*, University of Minnesota Press, Minneapolis.
- J. K. Gibson-Graham, 2006b, *A Postcapitalist Politics*, University of Minnesota Press, Minneapolis.
- Clarence J. Glacken, 1967, *Traces on the Rhodian Shore: nature and culture in Western thought from ancient times to the end of the eighteenth century*, University of California Press, Berkeley.
- Derek Gregory, 1978, *Ideology, Science and Human Geography*, Hutchinson, London.
- Peter Haggett, 1965, *Locational Analysis in Human Geography*, Edward Arnold, London.
- (ピーターハゲット (野間三郎監訳・梶川勇作訳), 1976, 『立地分析』上巻 下巻, 大明堂)
- Peter Haggett, 1983, *Geography: a modern synthesis (3rd ed. rev.)*, Harper & Row, New York.
- Peter Haggett, Richard Chorley and D. R. Stoddart, 1965, Scale standards in geographical research: a new measure of areal magnitude, *Nature*, 205, 844-847.
- Chauncy D. Harris, 1977, (Obituary) Edward Louis Ullman, 1912-1976, *AAAG*, 67-4, 595-600.
- Richard Hartshorne, 1939, *The Nature of Geography: a critical survey of current thought in the light of the past*, The Association of American Geographers, Lancaster, PA.
- David Harvey, 1969, *Explanation in Geography*, Edward Arnold, London.
- David Harvey, 1973, *Social Justice and the City*, Blackwell, Oxford.
- Walter Isard, 1956, *Location and Space-Economy: a general theory relating to industrial location, market areas, land use, trade, and urban structure*, M.I.T. Press, Cambridge
- (アイザード (細野昭雄ほか共訳), 1964, 『立地と空間経済: 工業立地, 市場地域, 土地利用, 貿易および都市構造に関する一般理論』, 朝倉書店)
- Henri Lefebvre, 1991, *The Production of Space*, Blackwell, Oxford.
- David Livingstone, 1993, *The Geographical Tradition: episodes in the history of a contested enterprise*, Blackwell, Oxford.
- Peter E. Lloyd and Peter Dicken, 1972, *Location in Space: a theoretical approach to economic geography*, Harper & Row, New York
- (ピーターディッケン, ピーター E ロイド (伊藤喜栄監訳・池谷江理子ほか訳), 1997, 『立地と空間: 経済地理学の基礎理論』上・下, 古今書院)
- David Lowenthal, 1961, Geography, experience, and imagination: towards a geographical epistemology, *AAAG*, 51, 241-60.

- David Lowenthal and Hugh Prince, 1965, English landscape tastes, *Geographical Review*, 55, 186–222.
- David Lowenthal and Martyn J. Bowden eds., 1976, *Geographies of the Mind: essays in historical geosophy in honor of John Kirtland Wright*, Oxford University Press. (Special publication of American Geographical Society of New York, no.40).
- 松尾容孝, 1988, フィールド研究としてのパークレー学派(1), 『鳥取大学教養部紀要』 22, 1–27
- Don Mitchell, 2000, *Cultural Geography: a critical introduction*, Blackwell, Oxford.
- 野間三郎・門村浩・中村和郎・野沢秀樹・堀信行, 1974, 「地域のシステム」に関する諸外国の研究—その展望, 『地学雑誌』, 83–1, 2, 19–37, 103–124
- Stan Openshaw and R. J. Abraham eds., 2000, *Geocomputation*, Taylor and Francis, London.
- Allen K. Philbrick, 1957, Principles of areal functional organization in regional human geography, *Economic Geography*, 33, 299–336.
- Robert Platt, 1959, *Field Study in American Geography*, (Department of Geography Research Paper No.61) The University of Chicago Press, Chicago.
- Douglas C. D. Pocock ed., 1981, *Humanistic Geography and Literature: essays on the experience of place*, Croom Helm, London.
- Karl R. Popper, 1934, *Logik der Forschung: zur Erkenntnistheorie der modernen Naturwissenschaft*, Springer  
(Karl R. Popper, 1959, *The Logic of Scientific Discovery*, Hutchinson, London. (English translation))  
(カール R ポパー (大内義一・森博訳), 1971, 1972, 『科学的発見の論理』上 下, 恒星社厚生閣)
- Allan Pred, 1967, Behavior and Location: foundations for a geographic and dynamic location theory (*Lund Studies in Geography; Ser. B. Human Geography*, no.27–28), Royal University of Lund, Lund.
- Hugh Prince, 1971, Real, imagined and abstract worlds of the past, in: C. Board, R.J. Chorley, P. Haggett and D.R. Stoddart (Eds), *Progress in Geography*, Vol. 3, London, 1–86.
- Edward Relph, 1976, *Place and Placelessness*, Pion, London.  
(エドワード レルフ (高野岳彦ほか訳), 1991, 『場所の現象学—没場所姓を越えて—』, 筑摩書房)
- Edward Relph, 1981, *Rational Landscapes and Humanistic Geography*, Croom Helm, London.
- Edward Relph, 1987, *The Modern Urban Landscape*, Crom Helm, London.  
(エドワード レルフ (高野岳彦ほか訳), 1999, 『都市景観の20世紀: モダンとポスト

モダンのトータルウォッチング』筑摩書房)

Frederick K. Schaefer, 1953, Exceptionalism in geography: a methodological examination, *AAAG*, 43, 226-249.

David M. Smith, 1973, Alternative "relevant" professional roles, *Area*, 5,

David M. Smith, 1977, *Human Geography: a welfare approach*, Edward Arnold, London.

Neil Smith, 1984, *Uneven Development: nature, capital, and the production of space*, Blackwell, Oxford.

水津一朗, 1972, 『地域の論理：世界と国家と地方』古今書院

水津一朗, 1982, 『地域の構造』大明堂

Erik. Swyngedouw, 1999, Modernity and hybridity: nature, regeneracionismo, and the production of the Spanish waterscape, 1890-1930, *AAAG*, 89, 443-465.

Yi-Fu Tuan, 1974, *Topophilia: a study of environmental perception, attitudes, and values*, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.

(イーファー トゥアン (小野有五・阿部一訳), 『トポフィリア：人間と環境』筑摩書房)

Yi-Fu Tuan, 1982, *Segmented Worlds and Self: group life and individual consciousness*, University of Minnesota Press, Minneapolis.

(イーファー トゥアン (阿部一訳), 『個人空間の誕生：食卓・家屋・劇場・世界』せりか書房)

Edward L. Ullman, 1956, The role of transportation and the bases for interaction, in: William L. Thomas, Jr. (Ed), *Man's Role in Changing the Face of the Earth*, University of Chicago Press, Chicago, 862-880.

Gilbert F. White, 1974, (Obituary) Edward A. Ackerman, 1911-1973, *AAAG*, 64-2, 297-309.

Raymond Williams, *Problems in Materialism and Culture: selected essays*, New Left Books, London.

John Kirtland Wright, 1947, Terrae incognitae: the place of the imagination in geography, *AAAG*, 37, 1-15.

John Kirtland Wright, 1966, *Human Nature in Geography*, Harvard University Press, Cambridge.